「心と体にやさしい重粒子線がん治療」

平成 23 年 10 月 22 日
（於）佐賀文化会館大ホール
堤　　静　香

皆様はじめまして､私は７年前に､重粒子線治療を受けました､堤　静香　と申します。
今日、私は東京から参りましたが、実は、私は、福岡県飯塚市の出身で、同じ九州の者として地元の皆様の前で､身近に､私の体験して参りましたお話をさせて頂きます事に、心から感謝を致しております。
拙文ですが、原稿を見ながら、お話しをさせて頂きたいと存じます。

頭頸部の骨肉腫に罹患

７年前の２００４年３月１１日、奇しくも東日本大震災が起きました同じ日、東京に住んでおります私は、築地のがんセンター中央病院に於いて、「頭頸部の骨肉腫」いわゆる、「顔に出来た骨のがん」だと宣告されました。

１００万人に１人と言われるこの頭頸部の骨肉腫は、５年生存率は３０％弱、しかも当時の治療法では、抗がん剤も、放射線治療も効果が無く、外科切除手術しか方法が無いと言われまして、愕然としたのを今でも鮮明に覚えております。

顔に出来た「骨肉腫」、昔は不治の病とされ、生還する人は居なかったと言われる難病で、昭和３９年に「愛と死を見つめて」と言う映画と歌が、大ヒットを飛ばしたのを御記憶の方もおられると思います。

主人公の大島みち子さん「ミコ」と同じ病で、吉永小百合さんが、ヒロイン「ミコ」を演じられた映画、と言った方がお解かりになるかと思います。

がんセンターで、外科切除手術では「顔が半分無くなる」と言われ、「私はこの病気を宣告された時、殆ど生きている状態では有りませんでした」。
女として「顔の半分を失う」と言う恐ろしい現実に、暗く深い奈落の底に突き落とされた恐怖感しかありませんでした。
恐怖と焦燥感の毎日、来る日も来る日も、終日仏壇の前に座って、ひたすら念じる世界に逃げ込む事しか出来ませんでした。

朝から晩まで親鸞の、正信念仏偈、仏説阿弥陀経、蓮如の御文章を憑かれたように、

繰り返し繰り返し拝んで、他の事など考える事さえ、恐ろしかったのです。
　真黒い闇、その先にあるのは死では無いか・・・、としか思えない極限の状態で、親鸞のお経の世界に逃げ込んでいる時だけが怖さを忘れる瞬間でした。

１０日程たったある朝、誰かに抱えられているように、身体が軽くなったのを感じました。

次第に心も軽くなり、来週から入院する手術祈願に、日頃から参詣している神社に行って見ようか、という気持ちにもなりました。
神社から帰る頃には「おや？」と思う程、すっかり気持ちの持ち様が変り、何か自分以外の力が確実に働いているのを、強く感じたのを覚えております。

それからです！奇跡としか思えない不思議な現象が起こったのは！
外科手術のため入院する３日前、主人が見つけて来た「新聞記事」との神懸り的な出逢いがありました。

重粒子線との出会い

２００４年３月２５日の夕方、木曜日の新聞に「重粒子線、がんの深部にピンポイント」という大きな見出しが目に飛び込んで参りました。
此れまでの放射線と違い、重粒子線というのは炭素イオンを加速器を使って、ピンポイントでがんに照射する、という内容で骨のがんにも効果が有るということでした。

私はその新聞記事に、何か直感的なものを感じました。
しかし、手術の為の入院は３月２９日の月曜日で、２７日と２８日は、土、日、病院はお休みなのです。
がんセンターに掛け合うには２６日､金曜日のたった１日しか時間はありませんでした。

主人は、翌朝早く、私の外科手術担当の先生に掛け合う為、病院に駆けつけました。

「重粒子線治療」、７年前のその当時、がんセンターの先生でも、どの程度、この高度先進医療に移行したばかりの治療法の認識がお有りだったかは定かではありません。
むしろ自分の手を離れて、未知との遭遇に一縷の望みを懸ける患者に「紹介状を書きましょう」と快く頷いて下さった先生に今では感謝さえ致しております。

放医研へ

このようにして、急転直下、私はがんセンター中央病院での手術を取り止め、３月２９日、本来入院するはずのその日、思い迷う事無く、千葉県稲毛市にある、「放射線医学総合研究所」通称「放医研」の門を叩いていたのでした。

この一連の出来事は今も「神様が降りて来て下さった日」として私の人生を左右する究極の１日として終生忘れる事は出来ません。

重粒子線がん治療、今ではマスコミにも取り上げられ、多くの人達が知る所となった高度先進医療ですが、７年前の当時は世界に二ヶ所、ドイツと日本だけでした。
しかも実際に稼働して、治療出来るのは、千葉県稲毛市にある「放医研」だけで知る人も少なかったのです。

又、重粒子線に辿り着く殆どの人が、大学病院や、大きな病院からの紹介だけで「新聞記事」を信じて駆け込む患者など居なかったそうです。

しかし、私の病気との闘いはここから始まりました。
１００万人に１人と言う頭頸部の「骨肉腫」、これ自体少ないこの病気の治療は症例数０、私が第一号！だと言う、耳を疑う言葉だったのです。

過去の臨床試験で低い線量の照射で５名の骨肉腫患者が全滅だった、という衝撃的な説明を受け、再び奈落の底に突き落とされたのを忘れられません。
ただ、７０,４グレイという高い線量に上げて行えば「成功するだろう」と言う予測はある、と言うことだけでした。

所謂身体に照射する高い線量を、顔面に施すと言う事だったのです。
当然症例数は　０、私が始めての試みです。
しかし、私は「此れしか治療法は無い」と閃いた決意は固く、一心不乱に駆け込んだ私には否も応も有りませんでした。

なぜなら、私の骨肉腫の治療法は、０か１００、１％の奇跡に懸けるしか方法が無かったのです。
迷う事無く「お願いします」と先生方に頭を下げておりました。

こうして私の重粒子線治療が始まりました。
７年前の重粒子線治療は未だ黎明期で、７０,４グレイの線量は１６回に分けて照射されることになり、２ヶ月の入院生活になりました。

勿論、今では入院日数も格段に減り、部位によっては通院での治療も可能になりました。
実際の照射時間は、２，３分で痛みも無く、毎回直ぐに終わりました。
更に医療機器や、造影剤の進化により、パワーポイントの映像にある様な、私の痛々しい赤い顔の副作用は、はるかに軽減されているそうです。

しかし、一朝一夕で此の画期的な「重粒子線がん治療」が確立されたのでは無く、その黎明期に一縷の望をかけて、この治療に勇気を持ってチャレンジした先人達が居たからこそだと思います。

当時の「重粒子線治療患者の闘病記録」が生かされ、症例数に繋がり、そして高度先進医療に繋がったのです。

私の場合は、はっきり言って「０か１００しか無い１％の奇跡」顔が半分無くなる、というぎりぎりの選択でした。
だからこそ、不治の病と言われて来た「頭頸部の骨肉腫」で生き残った私は、重粒子線がん治療の威力と、素晴らしさを自信を持って皆様にお伝え出来るのです。
頭頸部の骨肉腫で、顔がある状態での生存は、私が世界最長記録だそうです。

重粒子線治療を終えて

しかし７年前、私の体験は文字通り手探りの状態でした。
まず照射後、２ヶ月で激痛が訪れ、痛み止めの薬は全く効かなくなりました。
オキシコンチンやＭＳコンチンと、モルヒネの錠剤の量もどんどん増えて参りましたが、激痛が取れない為に、再度入院する事になりました。

新しく開発された皮膚に貼るモルヒネ「デュロテップ」と言う新しいタイプのモルヒネを使って痛みを取る試みをしたのです。
錠剤でしたら３２０錠に換算される、と言われた、この「デュロテップ」のお陰で、激痛を取ることが出来、漸く、日常生活を取り戻す事が出来ました。
痛みが取れた時、私は、現代の日進月歩の医療に救われ、「生きている！　生かされている！　幸せ！」と痛感したものです。

勿論、この痛みも個人差があり、部位によっては痛みを感じない人も多いのです。
ともかく症例第一号の私の症状は、色々なことが起こり、私だけでなく、院長を始めとする、５名のプロジェクトチームの先生方にとっても、手探りの状態でした。

何故なら、７０,４グレイの高い線量照射第一号の私以外、症状の実績が無い為に、後にも先にも私の治療結果が先生達の経験になり､後に続く患者への治療方法に繋がると言う事実でした。
私も先生達も必死でした。膨大な資料が出来上がりました。

腐骨の除去

プロジェクトの先生の中に、東京歯科大学の先生がおられ、１年後、この東京歯科大学において、重粒子線治療の為、後遺症として出来た「腐骨」、つまり、「腐った骨」を、除去する手術をする事になりました。
重粒子線治療の後遺症の１つ、口腔内に出来た「腐骨除去」の為の手術は、そのタイミングが最も大切だとされていますが､私の資料が大いに役に立っている､と歯科大の先生にも言われ、感激したのを覚えております。
今でも２ヶ月に一度、東京歯科大の口腔外科に口腔ケアーに通っております。

この様に､次から次と段階を置いて起こる症状に３年間は､後ろを振り返る余裕すら有りませんでした。
３年を経過した頃､ようやく一区切りが付き､これから先の自分の生き方というものをじっくり考えてみようか、という気持ちになりました。

感謝の気持ち　を

「生き延びられるかもしれない」、と思いました。
それには１年１年を、いいえ、１瞬１瞬を大切に、思い残す事無く生きようと思い、このパッションを形にしたい、と思い立ったのです。

重粒子線治療で生かされている私は、生きている、それだけで丸儲けです。
お世話になった人達に恩返しをして行こうと考えました。

まず３年前、２６年間同居している私の母が、８８歳の米寿を迎えるのと､此の治療を見つけてくれた命の恩人でもある主人が、７０歳の古希を迎える為「米寿と古希を祝う会」を計画し、祝いました。
常に支えてくれた､夫と母への感謝の念と､病気になっても変らずに励ましてくれた友人、知人への御礼を込めて、３０名の温かな思い出に残るパーテーに成りました。

その母も今年１月大腸がんで他界しましたが､私が､がんに罹った経験が､多いに母の看護の役に立ち､最期まで母に告知することも無く､母はがん患者であることを知らずに、９１歳の天寿を全うし、安らかに旅立ちました。

マコとの出会い

又、その間、不思議な出逢いがございました。
夫の大学の講演会で、同じ大学出身の「愛と死を見つめて」の著者、河野實さんの講演に招かれ、「マコ」に対面した事でした。

マコさんは私の顔を見ると、本当に「顔がありますね」と驚愕され、「信じられない！」と何度もおっしゃったのです。
マコさんとの出会いは、何か目に見えない因縁のようなものをお互い感じ、それ以来、今ではメールのやり取りをして、親交を頂いております。

ボランティア　へ

私はこの７年間で、多くのがん患者の方と重粒子線治療を通じて係わり会うようになりました。重粒子線治療のがん仲間は、北海道から、鹿児島まで全国にいらっしゃいます。
いつも、お互いの治療内容や、経過報告をこまめに交換し合って相互の理解を深め合っております

中でも埼玉県のくるみ幼稚園の園長、家所さんとの巡り合いは劇的で、この方から慈愛に満ちた優しさと、人間の強さを学び、ボランティアに目覚めるようになりました。

私と同じように病気に悩む人達、特にがんに罹患した人の焦燥感や奈落の底に落ち込んだ人への聞き役「傾聴」に東奔西走するようになりました。

がんに罹った人は、どなたも、同じように不安な気持ちを抱えているものです。
自分が奈落の底に落ち込んだ時の気持ちを常に忘れず、なるべく直接お会いして私の顔を見て頂き、「この様に治るのですよ」と元気な姿を見て頂き、安心して頂く様にしております。

大学へのチャレンジ

そして私に取りまして、この７年の歳月の中で最も報われる出来事が２年前の春に起こりました。
立教セカンドステージ大学に合格し、この歳で大学生になった事です。
入学規定のエッセイには、これまでの「５年間の闘病生活」を書きました。
すると、大学からの要請で、テレビ出演のご依頼が有り、「生島ヒロシ・定年塾」という番組に出演する事になったのです。

「生きる・学ぶ・ある女性の挑戦」と言うタイトルの「生島ヒロシ・定年塾」出演で闘

病の生活をお話させて頂きました。
そのお陰で卒業までの２年間に、生島さんの番組に４回出演し、重粒子線がん治療をメディアに広くお知らせし、更に大きな反響を呼ぶことになりました。

昨年５月には、重粒子線治療患者代表で「第４９回粒子線治療世界会議」という世界各国の医学者が集う大きな会議の公開講座で２０分の講演をさせて頂きました。
私の地道な重粒子線がん治療の講演活動は花開いたのです。
活字やメディアの力は大きく、私の重粒子線治療の普及活動の範囲は広くなり、こうして九州の地までお伺いするまでになりました。

一人でも多くのがん患者の方に「心と体に優しい重粒子線がん治療」を知って頂きたいのです。そして、真暗闇から希望の光を感じ取って頂きたいのです。

親鸞について

私が親鸞のお経を読むようになりましたのは、代々敬虔な浄土真宗信徒としての母に、３０年も前に貰った経本から始まりました。
親鸞の経本を通して、念じる世界に入っていたからこそ、常に、親鸞は私の生活の隣に居ました。だからこそ、強い気持ちで未知の世界、重粒子線治療にもチャレンジ出来たと自負致しております。

そして、私は立教セカンドステージ大学の修了論文のテーマを「親鸞考察」に一点の迷いも無く決めることが出来ました。お陰様で、その論文は「親鸞考察」か、「堤　静香」で検索すると、ホームページ上でご覧頂けるようになっております。

私はこうして「骨肉腫」と言う大病を通じて「人は生きているのだろうか？　生かされているのではあるまいか？」と強く感じるようになりました。

「禍福は糾える縄の如し」と申しますが、生きていると良い事も、悪い事も容赦なく起こりますが、「どんな時も、何が起こっても、最後まで諦めない！」と言う強い信念で立ち向いたいと思っています。

「諦めない気持ち」、そこにきっと神仏が宿り、神のご加護があることを信じて疑いません。「最後まで諦めない！勇気を持って！」これが私のメッセージです。

実は、７年前に遭遇した新聞記事は、先程ご講演をされました辻井博彦先生の記事でし

た。先生が、詳しくご説明をされておられ、その辻井先生の記事を読んだからこそ、放医研へ心が動いたのです。

そして、今回この佐賀県に「九州国際重粒子線がん治療センター」が出来ます事も、九州出身の私には、何か不思議な縁（えにし）を感じて居ります。

本日、この様な講演の機会を与えて下さいました、佐賀国際重粒子線がん治療財団とサガテレビの皆様に、心から御礼を申し上げます。
この九州の地に、重粒子線がん治療施設が、出来ます事に大きな喜びと、期待を致しております。

そして、多くのがん患者の皆様の、希望の場所に成りますことを、願って止みません。一日も早く、１人でも多くの、がん患者の皆様が、安心して治療出来ますことを、心から祈念申し上げて居ります。

本日はご清聴、有難う御座いました。